

||||| ジャニス・ジョップリン、ジミ・ヘンドリックス、それから「あしたのジョー」とか、「燃え尽きた死」というのがかつてありました。こういう破滅的な死をどう思いますか？

私のように遅れてきた人間にとって燃え尽きるというような特権的な死は決して許されないんです。燃え尽きるなどということは、「革命」という言葉を口にする事ができる時代でなければありえないでしょう。「改革」などという言葉が飛び交うこの時代では、継続という力に継るよりほかに術はないと思う。

燃え尽きるためには何事かに絶対的な価値を見出さなければならぬからです。全てが相対化された時代に生まれた私たちに、特権的な死を望めるわけがなないんです。

私たちの世代には、破滅することは許されていません。

||||| 山田かまちという少年は、九〇年代の高野悦子的存在なのではないか？ 夭折ということについてはどう思っていますか？
また尾崎豊の死についてはどうでしょうか？

死後山田かまちが、私たちの前に忽然と姿を現したのは、彼が遺した詩と絵画が優れていたからですね。そして若いひとたちに強い関心をもたれたのは、何といっても彼がこの現実世界を生き抜くにはあまりにも不適合者だったということが大きいと思う。この世界を生きる適性を持っている人間は、純粹、繊細、眞実、清廉などというものから遠く離れているという負い目を持っているからです。生きている自分は不純であるという、負の意識が、山田かまちへの憧憬にも似た関心呼び起こしたんです。

高野悦子の場合は、全共闘世代の原点であった「私とは誰か、私を取り巻いている世界とは何か」という原理を彼女ほどぎりぎりまで問い詰めたのだろうかという事が、団塊の世代の負い目に触れたんですね。しかし高野悦子に取り残されたひとびとは、彼女のように「できなかつた」けれど、彼女は同志であって、高野悦子は自己の一部であったかのような意識を持てたんだろうと思います。で

も山田かまちの死を取り巻く若者たちには、彼と共有するものは何もない。時代が二人の死の意味を大きく隔たせてるんですよ。高野悦子の死は、全体の中の部分の死、つまり時代の死だった。でも、山田かまちの死はあくまで個人的な死にすぎない。

エレキギターによる感電死ということを受け入れたくないひとの間で、自殺したんだということが信じられているようですが、山田かまちの死には夭折という冠をかぶせるしかないと思います。そしてもし彼が成人して成熟していたら、どのような絵を描いただろうかと問うことは意味がないわけで、若くして息を引き取ったその瞬間に完結した才能にこそ、夭折という冠は与えられるものだからです。

尾崎豊の死は、ドラッグが絡んでいたという点では七〇年代の死をイメージさせますよね。ファンたちは、彼をジミ・ヘンドリックスか、ジニス・ジョップリンのような教祖カリスマの祭壇に祀り、伝説化しようとしています。しかし私にとってはむしろエルヴィス・プレスリーの死を思い起こさせるんです。プレスリーの死は、肥満のためにありとあらゆる薬物を使用したことが原因のようですが、尾崎豊の

場合は、年をとること、成熟することへの恐怖によるものではないかという気がしてならないんです。プレスリーだって子どものころの好物だったドーナツやジェリービーンズを食べることを止められなかったそうですからね。二人とも老いることが許されなかったんです。

なぜ尾崎は、伝えられた女優との恋を成就させなかったんでしょうか。私は尾崎は不倫や離婚に対する嫌悪感があったのではないかと考えているんです。それらは大人の行為であり、「十七歳の地図」にはそんな行き先はないですからね。「十七歳の地図」の中で迷子になってしまった、という感じなのかな。